

<前回：オリエンテーション>

<授業の概要・目的>

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新たな展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たな展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2019年度前期は、これまで数年の講義から浮かび上がった諸問題から、「言語」の問題を集中的に取り上げることによって、キリスト教的な視点から宗教哲学を構築する議論を始めたい。

<成績評価> レポートによる。

<受講の注意事項> 6/18は6/20に変更。

<「キリスト教思想と宗教哲学」の説明：問いとしての宗教哲学>

「現代日本における宗教哲学の構築をめざして」(キリスト教学専修『キリスト教学研究室紀要』5号、2017年3月)

<導入：キリスト教にとって「言語」とはいかなる問題か>

「キリスト教思想と宗教言語—象徴・隠喩・テキスト—」⁽¹⁾

(日独文化研究所年報『文明と哲学』第8号、こぶし書房、2016年、pp.196-209)。

1 はじめに

宗教としてのキリスト教にとって、言葉・言語はその核心に属している。後に論じるように、実にキリスト教は言葉の宗教と言うべき内実を有しているのである。本稿では、次の三つの問いから、このキリスト教における言葉・言語の問題へのアプローチが試みられる。第一の問いは、キリスト教的な宗教経験とその象徴体系において、言語はいかなる位置を占めるのか、というものであり、生の営みとしての宗教(キリスト教)における言葉の位置づけが問題となる。第二の問いは、神についていかに語るのか、つまり、神と人間の関係性における言葉の問題であり、神について語る可能性と具体性をめぐる問いである。そして、第三の問いは、神に関する事柄をいかに他者へ伝達するのかである。これは、人間の相互関係における言葉のあり方に関わっており、宗教的現実をめぐる他者とのコミュニケーションの問題である。

2 第一の問い：象徴体系における言語

第一の問いは、キリスト教の宗教経験において、言葉はいかなる位置を占めるかというものであって、この問いを論じる前に、宗教経験の場あるいはその表現としての宗教的象徴に触れておく必要がある。20世紀は言語とともに、象徴が多くの学的領域において研究テーマとなった時代であり、宗教的象徴をめぐるさまざまな議論が展開された。たとえば、エルンスト・カッシーラーの象徴論は、人間を「象徴を操る動物」と捉え、その精神諸活動をそれぞれに固有な象徴形式において論じることを可能にし、こうした動向に文化人類学における儀礼研究などの進展が重なることによって、宗教をその固有性において、しかも具体性に即して捉えることができるようになった。⁽²⁾ まさに、宗教は象徴に

において構成された象徴の宇宙と言うべき存在であり、宗教的実在は象徴において成立すると言わねばならない。キリスト教思想における象徴論の展開も、このような文脈に属しており、たとえば、象徴論を基礎として自らの方法論を構築しているティリッヒや波多野のキリスト教思想は、この典型と言えよう。

．．．

キリスト教を構成するあるいはその前提となる三つの事柄、つまりキリスト（神の言葉、先在のロゴスの受肉）、聖書、説教のいずれもが、まさに言葉であることを考えれば、言語なしには、キリスト教的実在は成り立たないと言わねばならない。したがって、第一の問いに対する答えは、次のようになる。キリスト教的象徴世界は、根本的に言語的であり、キリスト教は言葉の宗教なのである。

3 第二の問い：神が語る言葉・神について語る言葉

キリスト教的宗教経験の成立の場である象徴体系において、言葉が中心的な位置を占めることが明らかになったのに続いて問題となるのは、では、神についていかに語るのか、という第二の問いである。神が人間に語りかけると言われる場合の言葉、人間が神（あるいは宗教経験）について語る場合の言葉についての問いである。神が語るという場合に、特殊な「神の言語」とでも言うべき言葉が存在するのだろうか。こうした問いは、たとえば、原初的な言語の再発見の試みや人工的な完全言語の創成の試みとなって、ヨーロッパ文化史を貫く、きわめて魅惑的なテーマを形作っているのである。⁽¹³⁾

この第二の問いに対する本稿の解答はさしあたり簡単なものである。つまり、神が人間に対して語りかけるのは人間の言語によってであり、人間が自らの宗教経験を語るのは人間の言語による、と。何か特殊な「神の言語」といったものが存在するわけではない。しかし、この解答は直ちに次の問いを生じる。では、人間の言葉によって神について語るのは、いかなる仕方によってなのか、人間の言葉はいかにして神の言葉になるのか。第二の問いとして探究すべきは、実はこちらの問いというべきかもしれない。また、こうした問いが発生する前提にあるのは、「神と人間との質的差異」という理解であり、ここから神についての認識と語りをめぐる多様な議論が展開されてきたのである。その点で、第二の問いは、キリスト教思想の伝統的な問題と言うことも可能であろう。

4 第三の問い：他者への伝達あるいはコミュニケーション

本稿で問うべき第三の問いは、神について他者へいかに伝達するのか、ということになる。隠喩がもたらした新しい認知は、どのようにして他者に伝達されるのかという問いは、おそらく、この新しい認知が他者においていかに反復的に生成するのかと定式化できるであろう。古い認知を揺り動かしそれを転換しつつ生成した新しい認知が他者においても生起するとき、そこに認知の共有が可能になり伝統の形成が行われるのである。この点を具体的に検討するために、以下においては、文のレベルに存在する隠喩を拡張したところに位置づけられるテキスト・レベルの言語表現、つまり物語という言語表現に注目することにしたい。

5 むすび

1. 現代思想における「言語」の問い

1. 現代思想・哲学とキリスト教思想・神学（相関関係）

その中心に「言語」の問題が位置する。

2. 森田雄三郎「現代神学の動向」1987年（『現代神学はどこへ行くか』教文館、2005年）。
「現代特有の歴史状況、とりわけ、急速に発展した今日の技術社会とその歪み」「システム化はいっそう細密化され加速され、これと連関して人間の精神運動と倫理生活も急速に様相を変えつつある」、「現代になってはじめて本格的な文字通りの世界史は始まった」、「人類全体の生存の根底を脅かす歪み」

「一九六〇年代に表面化したキリスト教内の神学運動は、人類の生活のこのような世界史的变化に対応する哲学運動と密接に関連している。」(33)

「H・アルバートによれば、第二次世界大戦終了直後に、厳しい試練を耐え抜いて生き残った西洋哲学は、三つのみであった。すなわち、論理実証主義に根を持つアングロサクソン系の分析哲学であり、第二は、ドイツ系の実存思想に典型的に代表される解釈学の流れであり、第三は正統派マルクス主義の弁証法であった。」(33-34)

「技術社会の出現とともに変化しつつある人類の世界史的全局面に共通の媒介として言語がいっそう深い意味を持ってくる（今日、世界言語として通用する言語は科学・技術言語だけであるという事実を見過ごしてはならない）。今日の「情報」社会にあっては、言語は人間主体の道具であると共に、人間をみずからのシステム内の要素として組み込み駆使する力でもある。根元的言語にかかわることを自認する宗教および神学もまた、かかる意味連関の中で、みずからの神学的意味連関を提示することを要求されているのである。」(35)

「哲学思想の動向を考え合わせて整理するなら、六〇年代以後に現われた新しい神学的動向のうち有意義を思われるものだけを挙げるならば、次の四つの流れに大別されるであろう。

一、解釈学としての神学

二、歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）

三、希望の神学・革新の神学（解放の神学）

四、プロセス神学」(35-36)

3. 哲学と神学の相関関係は偶然ではない。神学の起源は哲学にある。

* 芦名定道「現代日本における宗教哲学の構築をめざして」

（京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第5号、2017年3月、pp.1-20）

「この古代ギリシャ哲学における宗教の主題化以降、哲学的思索は常に何らの仕方で宗教的テーマに関わってきたのであり、その意味で、哲学は宗教哲学を包括し、あるいは宗教哲学を思索の頂点としてきたと言わねばならない。キリスト教思想との関わりという点で注目すべき最初期の宗教哲学としては、まずプラトンとアリストテレスの哲学的思惟を挙げるべきであるが、ここでは、プラトン哲学が、まさに宗教哲学というべき内実を有しており、キリスト教思想における哲学と神学という問題領域と深く関わっている点についてのみ確認しておきたい。⁽⁸⁾

キリスト教思想における哲学と神学との関わりを考える場合、「自然神学」は特徴的な問題領域として位置づけることができる。⁽⁹⁾「自然神学」は、一方でその「神学」という名称から予想されるように、啓示神学と対を成すものとしてキリスト教神学に接続されるが、

しかし他方、それは人間の「自然」的理性によって構築された学科であって、しばしば、神学というよりも、宗教哲学と解すべきとの議論がなされてきた。さらに、こうした自然神学は、キリスト教思想が生み出したものではなく、古代ギリシャ哲学の中にその誕生を確認すべきなのである。⁽¹⁰⁾ 以下に引用するプラトンの『法律』の議論は、プラトンの自然神学の核心部分というべきものであり、ここに、プラトンの宗教哲学を確認することができる⁽¹¹⁾——キリスト教思想はこのギリシャ的自然神学を継承しそれによってキリスト教固有の学問として神学を構築した⁽¹²⁾——。

(8) 古代キリスト教におけるプラトン哲学の意義については、ペリカンの次の研究を参照。

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press, 1993.
, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press, 1997.

(9) 自然神学については、次の拙論を参照。芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。

(10) この点については、田川建三『キリスト教思想への招待』（勁草書房、2004年）の「第一章 人間は被造物」においても具体的に論じられている。

(11) プラトン『法律』の引用は、岩波書店『プラトン全集 13』から行われる。

(12) Wolfhart Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp, 1977. (W・パネンベルク『学問論と神学』教文館、2014年)、特に「序論 学問論と神学」の「第二節 神学の学問性要求の起源」を参照。」

4. 現代思想の動向

言語論的転回 (Linguistic Turn) からポスト近代

解釈学はもちろん、分析哲学、プラグマティズムからマルクス主義哲学まで、20世紀の現代哲学の諸潮流においては、「言語」「言語論」が議論の焦点となった。(ローティが1967年に編集したアンソロジーのタイトルとなって以来、一般化した。)

認識論から言語論へ。ハーバーマス

5. ポスト近代

* 芦名定道「ポスト近代とは何か——現代神学2 (一九七〇年代～二〇一〇年代)」

(『福音と世界』2016. 12、新教出版社)

「ポスト・・・」の時代

ここ数十年の思想動向を見ると、ポストモダン、ポストリベラル、ポスト世俗化時代など、「ポスト・・・」というキャッチフレーズに溢れていることがわかる。以前日本の宗教研究において新宗教に対して「新々宗教」という言葉が使われたように、「ポスト・・・」もインフレ状態であり、賞味期限が切れつつあるのかもしれない。しかし、現代世界においては、多様・多層・多形的な変化が急激に進行中であり、これが神学にも反映していることは疑いない。

こうした思想動向は何を意味しているのだろうか。マクグラスは「科学と宗教」をめぐる新しい問題状況を説明する中で、次のように述べている。

「現代西洋文化のいかなる局面を探究するにせよ、《ポストモダン・シフト》としばしば呼ばれるものとの関連なしに、探究することは不可能である。この潮流の源泉は少な

くとも一九七〇年代初期に遡るとしても、その衝撃が十分に感じられるのは、一九八〇年代末になってからである。一般に、ポストモダニズムについては、絶対的なもの、固定された確実なものあるいは基盤的なものを伴わない文化的な感受性のようなものと解されている。それは、多元性と多様性を享受し人間のあらゆる思考の徹底的な《状況性》を考え抜くことをめざす」(Alister E. McGrath, *The Foundation of Dialogue in Science & Religion*, Blackwell, 1998, pp.9-10.)。

また、ポストモダンという用語の震源地の一人と言えるリオタールの説明では、次のようになる。

「この研究が対象とするのは、高度に発展した先進社会における知の現在の状況である。われわれはそれを《ポスト・モダン》と呼ぶことにした。この用語は、現在、アメリカ大陸の社会学者や批評家たちによって広く用いられている。それは、十九世紀末からはじまって、科学や文学、芸術のゲーム規則に大幅な変更を迫った一連の変化を経た後の文化の状態を指して言われている。ここでは、われわれは、こうした一連の変化を、物語の危機との関係において位置付けたいと思う」(ジャン=フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』風の薔薇、一九八六年、七頁)、「極度の単純化を懼れずに言えば、《ポスト・モダン》とは、まずなによりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう。」(八～九頁)

ポストモダンが以上のような内実のものであるとすれば、それは、弁証法神学を含め、近代以降のキリスト教神学全体に対しても重大な帰結を生じざるを得ない。キリスト教は基本的に大きな物語に依拠しているからである。近代的知の、そして近代以降の神学の特徴である、方法論的厳密さ、体系構築といったものは、ポストモダンの潮流においてはその価値や有効性を大幅に喪失することになる。これはまさに組織神学の危機というべきかもしれない。ポストモダンの流行に乗って「体系的」を放棄した組織神学は、「組織」神学たり得るのか。また体系的思惟の彼方への跳躍は、神学的思惟の断念とならないのか。ポスト近代を生きる神学の悩みはつきない。(**)しかし、体系的思惟の後退とともに、神学的議論が各論化し、神学的知が分散化に陥っていることは否定できないだろう。実際、リオタールの言う「メタ物語に対する不信感」は、イエール学派の神学的潮流などにおいて顕著であり、神学的思惟も部分的にポストモダンに足を踏み入れているのである。

しかし、「近代」(前回説明)はさまざまなほころびを顕わにしつつも、基本的には未だ健在であり、現代神学もその総体においては、近代神学、近代キリスト教との連続性を堅持している。さきに述べた組織神学の危機も、実はポストモダンが主要な原因ではなく、むしろ近代自体の内部現象と解することも十分可能である。ティリッヒは、一九三〇年代にすでに、近代化プロセスの内部で、プロテスタントとカトリックの対立によって規定されたプロテスタント時代が過ぎようとしていると語った(「プロテスタント時代の終焉?」一九三七年。白水社刊『ティリッヒ著作集』第五巻、所収)。この「ポストプロテスタント時代」の到来は、近代化プロセスの内部における新しいフェイズというべきものであり(近代キリスト教のエキュメニカル・フェイズ)、いわゆるポストモダンという表現はこうしたものの一つの面を指示するに過ぎない。

(**) 本連載では、「ポストモダン」「ホストリベラル」「ポスト世俗化時代」などを「ポスト近代」として包括的に表現するという基本方針をとりたい(用語法に首尾一貫性が欠

ける場合は、ご容赦いただきたい)。なお、リオタールのポストモダン論と関連する、イエール学派の「物語の神学」(キリスト教新保守主義)を詳細に論じた文献として、栗林輝夫「ポストリベラル神学が語る共同体の物語——キリスト教新保守主義のめざすもの」(関西学院大学『キリスト教と文化研究』5号、二〇〇四年、五三～一〇九頁)を参照。また「大きな物語」の対極に位置するのは、「〈私〉だけの神」(ウルリッヒ・ベック)である。」

6. 歴史主義と反歴史主義と対立と再統合

- ・歴史主義／反歴史主義／両者の対立の克服＝統合
- ・フッサール現象学(前期の記述心理学と中期・イデーン期の超越論的現象学)と構造主義は、19世紀の歴史主義へのアンチ・テーゼとして位置づけられる。
- ・構造主義からポスト構造主義へ

7. 象徴論1／隠喩論／象徴論2

- ・「言語・非言語」→言語的要素→「言語からイメージへ」

8. Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.

3. Metaphor and Symbol

From Metaphor to Symbol

The Semantic Moment of a Symbol / The Non-Semantic Moment of a Symbol

This may be done in three steps. It is first possible to identify the semantic kernel characteristic of every symbol, however different each might be, on the basis of the structure of meaning operative in metaphorical utterances. Second, the metaphorical functioning of language will allow us to isolate the non-linguistic stratum of symbols, the principle of its dissemination, through a method of contrast. Finally, in return, this new understanding of symbols will give rise to further developments in the theory of metaphor, which would otherwise remain concealed. In this way the theory of symbols will allow us to complete that of metaphor. (54)

Metaphor occurs in the already purified universe of the *logos*, while the symbol hesitates on the dividing line between *bios* and *logos*. It testifies to the primordial rootedness of Discourse in Life. It is born where force and form coincide. (59)